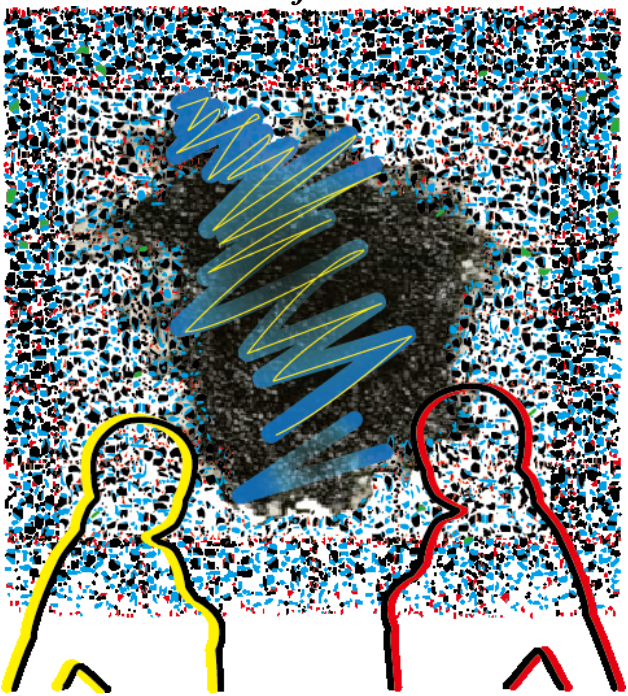
詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 13 号
2018 年 3 月

目次

伊東友乃	傘をさす	1
	夕陽	2
	よぶん	4
	恵み	6
	損ねる	8
画図佳織	二月のトマト	10
関根全宏	わたしを探して	12
田中はじめ	冷え性のあなたへ	14
	21 世紀ニッポンを嘆く	16
戸張雅登	イースターの呼び声	20
	透明人間	22
當津宏昭	百パーセント社会	24
	駅と踏切	26
	かくれオニ	28
東野　潤	ぼくらの生命	30
渡辺信二	落ちて埋もれて	31
	失意	33
	病に伏すおまえへ	34

表紙原画

鈴木順三	「わがままボディ・1」	(表紙)
	「わがままボディ・2」	(裏表紙)

傘をさす

伊東友乃

巣くっている朝は
ところどころ破けて　綺麗　ぼうっと
なんどもかきあげた髪は
ヒーターの熱でぱさついて
でも　けっきょく
どこにも行けない身体は　おなじ
ずっと開けないファイルのなかで
うすっぺらい宇宙が
ひかっている
会えないままの人も
立ちつくして　傘をさす
雨のなか
いっしょに行きましょうか　と
声をかけられるのを待っている

夕陽

伊東友乃

そこらへんに落ちている
夕陽が
なんとまあ　贅沢なことよ
ずっと痒い
わたしの背中のうえも
うすく
塗られていく　やさしさ
このあたたかさ　は
と問おうとするとき
は　に息をふきかけると
は　は粉になり
昨日がのこした
尾びれに
くっついていく

時間のかたわれ
その　所在のなさよ

どこまでも　閉じられた
窓に
膜がかけられ
なつかしい　あたたかさ
内に　内にこもるように
いつまでも
遠くのあの人を
まっているように

よぶん

伊東友乃

それはまだ3月
春になるのをぐずる曇りの日
電車の窓のむこうにひろがる
何も植わってない畑に
てんてんと黄色い花々よ
そこに蝶が
いればいいのだけれど
いない
さっとなにかが落ちてきたと顔をあげたら
鼻先にはりつくのは
光
ぶあつい雲から
するどく切り込んできた
硬い光　生まれたての
純性
黄色が滲んで　たわむ　を繰り返し
ちらちら反射する

流れでる体液とかわらない
なめらかな温度
指先でぬぐいたくなる
目のなかに小さじ一杯ぶん
よぶんに　あたたかいもの

恵み

伊東友乃

背中はずっと丸まって
首がつきだしているこの夜に
宇宙から　サイレンが鳴る
かんかんに響き渡って
海になだれ込む

差し出したばかりなのです
一通の手紙から　無限の言葉が
しぼりとられる

たしかに　温かくて
紅くつややかな頬だった
じゅうぶんに生きていた
なのに　それは

息を吸うと
からめとられるので

目をつむります

いつだってそうだ
遅すぎるか　早すぎるかで
人には選べない

青い星が
そのものひとつの生命が
呼吸する

見渡せないむこうに
あふれだす恵み

いま　はじめて
愛　という言葉を使いたいです

損ねる

伊東友乃

損ねる瞬間が
好き　と言う
桜のいっとうきれいな時を
損ねる　が
頭のなかでは
花びらがわんさか
はみでていくほど舞って
眼球のおく
むこうで青が佇んでいる
損ねてしまったものへの
あこがれは
骨まで　段階的に軋ませる
爪先らへんの
痛みは限定的だ　が
爪を切れば
さわりたくなる
まあたらしい土

ちがう種になったきもちで
ふみしめると　そのひんやりさは
どうだ
地球そのもの
損ねてしまった
進化のみちすじ
がりがり味わうことのできなかった
最後の
春

二月のトマト

画図佳織

彼が枕元へトマトを持ってきた
赤いくし形に塩をつけて
布団で寝ているわたしに
親鳥のように食べさせる

わたしは口をまるく開け
奥歯で噛みしめる
舌の上に
しょっぱく青い叢が広がっていく

もう一切れ　彼が箸でつまみ上げる
ビタミンも必要だから、と言って

なんの契約も義務もお互いないのに

旬でもないトマトに
大きく口を開ける

わたしを探して

関根全宏

冬の木立を歩いている
木立の中を歩いていると
光に音が吸い込まれ
人影が二つ　木陰に浮かんだ

彼らは優雅に球で戯れ
わたしは　冷気で白む息に
影でもないわたしを感じ
なおひとり　歩いてゆく

歩いていると先が開け
外から音が　漏れてくる
何処へ　など知る筈もなく
ただ　躰の重みを僅かに感じ

誰でもないわたしは
わたしを引きずり　歩いている

冷え性のあなたへ

田中はじめ

あなたは　鼠に触われますか
ミッキーやミニーなら
ハグして写真撮ってするでしょうが
どうして自然の鼠には触われないのですか

実は　あなたにも鼠が二匹いる
それが鼠径部です
人間が二本足で立つため
直立歩行の負担
重力や体重の負担を鼠蹊部が担います
そこには　動脈　静脈　リンパ腺
鼠径靭帯などが走るのに
そのすぐ下が骨なので
腰痛を含めて　不都合が集中する場所です

直立歩行が　自然離れの始まりならば
鼠径部は　いわば　不自然さの象徴

逆に　鼠径部を鍛えれば
猫のように　体長の５倍　飛べるかもしれない
鼠径部がもっと太ければ
猫と同じく　足の冷えなど無いかもしれない

そもそも人間に残された最後の自然は
じぶんの身体です
それを知れば
まさかと思うでしょうが
鼠だって　踵に甘噛みしてくれるかも知れません

２１世紀ニッポンを嘆く

田中はじめ

なんという時代だろう　樹木について語ることが
ほとんど犯罪に等しいとは！　　ブレヒト(1938)

なんという時代になったのだろう
雲を青く赤く彩る太陽
森のなかを渡る風
土の懐かしい匂い
言葉に癒しを求めることが
この世の不正や悪に目を瞑るため
ほとんど犯罪であるとは！

なんという時代になったのだろう
花鳥風月を愛でることが
ジュゴンを見殺しにし
辺野古沖の
絶滅危惧種２６２種を見殺しにし
ついには　人類を絶滅危惧種に追いやるとは

なんという時代になったのだろう
これだけ情報が溢れているのに
目先の楽しさに溺れ
じぶんたちの幸せを求め
原子力緊急事態宣言が今もなお
発令中であることを知らないとは

なんという時代になったのだろう
他者がじぶんの生活を覗くのは
プライヴァシーの侵害だと騒ぐのに
警察がじぶんのＬＩＮＥやＴＷＩＴＴＥＲを監視しても
別に悪いことしてないから構わない　という
若い人の　なんと多いことか
そもそも　スノーデンを知らないらしい

なんという時代になったのだろう
政治を会に持ち込みません
と宣言することが　いかに政治的なことなのか
これを全く理解しない人たちが
親睦のために　詩を書いていて
その一人が　現代詩人会の会長だとは

なんという時代になったのだろう
これだけ情報が溢れているのに
じぶんから知ろうとせず
目先の心地良さ　快さ　に我を忘れて
無知　未知が　いかに多くの人を傷つけるのか　気付かないとは

なんという時代になったのだろう
じぶんたちの幸せだけで生きてゆくとは
なんと想像力の乏しい時代なのだろう
じぶんたちだけで幸せになるはずがない
じぶんたちだけが幸せであってはならないとは気付かない

なんと愚かな時代なのだろう

いや　もっと愚かなのは
こういう時代になったと思うことだ
時代は　決して　自然現象ではなく
人為的なものだから
時代になるのではなくて
誰かがこういう時代にしている
それは　誰なのか

答えは分かっている
この愚かな時代に見合う愚かなリーダーよりも
もっとも愚かなのは
そういうリーダーを選び支持するわれわれだろう

ああ　なんという時代になったのだろう

イースターの呼び声

戸張雅登

ウサギが跳んで　春を告げる
チョコレートを頬張る子どもたち
草むらに隠れたタマゴは　見つからない

庭師が植えたニンジンを　狙った一匹が
垣根に空いたアーチを潜り抜ける
白い毛並みに付いた草の切れ端

一輪車に大きな剪定ばさみとタマゴを乗せて
池に架かった石橋を渡る庭師
その後ろをついていく　白い影

木陰で腰をおろして一休み
赤いハンカチから出てきたのは　少年の親指

寄り添う小さな従者に与え

つぶらな瞳に微笑みかける

満腹のウサギは草むらに消えた

透明人間

戸張雅登

しとしとと　降る雨に
聞き入る心の余裕なく
道急ぐ　あなたの足取り
フードが邪魔をして
表情はわからない

食事中はうつむいて
頭にあるのは他のこと
目の前にいるのは誰でもない　わたし
ハヤシライスだけが減っていく

あなたの瞳の中で
わたしは何色に写っているの？

透明ならば　いっそ汚濁の沼に身を浸し
泥の体で　あなたの行く手を塞ぎたい

ただ気づいてほしいから

それでも　いじわるな雨が
わたしを裸にして　置き去りにする

百パーセント社会

當津宏昭

人間よりも人間らしいＡＩが生まれたら
我らの生活楽になる
人間とＡＩ共存共栄
機械の精度と生身の温もり
両立叶った素敵な社会

「ＡＩが人間を支配するなどあり得ません」

やがて社会に
ＡＩよりもＡＩらしい人間が現れる
ミスのない　完璧な世界の実現へ
全ての叡智が結集する

人間らしい人間に

居場所はあるか
不用品扱いの人間が
ポイ捨てされはしないか

駅と踏切

當津宏昭

駅の隣の踏切を渡る
ホームから発車ベルが聞こえた
警報音が鳴り　遮断機が降りる
人も車も動きを止める

普通列車が
重たげに走り出していく
やがて右からまた
快速列車が　通り過ぎていく
警報音をかき消す轟音と風圧を残して

大きい物は　大きい音は
怖い
子どもの頃からそう　今だってそう

遮断機が　がが　と持ち上がったときには
すっかり縮こまった　私
もう動けない

隠れオニ

當津宏昭

小さい頃 良くやった
隠れんぼと鬼ごっこを足したもの
不思議な遊びだった
人の臆病さと無責任を足したようで

小さい頃は マンガの敵キャラが追って来ると勝手に決め付けて
母親を部屋に閉じ込め
狭い廊下 息を殺して行ったり来たりした

今でもまだ
見つからぬように
いつでも逃げられるように

どこへ？どこから？

おれ　一体何から隠れ
何から逃げているのか

ぼくらの生命

東野　潤

世間に隠れた　目立たぬ生活だけど
ぼくらは　それがとても愛しい
せめて　健康には気をつけて

緑の野菜を　ちゃんと食べよう
そう　睡眠もたっぷりと
天気の良い日は　ひなたぼっこだ

悠久のエネルギー　太陽は
誰にでも　差別なく注ぐから
社会のデータに上がらない

晴耕雨読の土地もない
地味な生活だけど　そのなかになお
ぼくらの強かな生命が息づく

落ちて埋もれて

渡辺信二

雨が落ちる　遥か彼方から
天国の床が壊れたように　激しく　雨が落ちてくる

雨が落ちれば　ぼくらもみな　落ちる
足も手も　身体も頭も　何もかも

身も心も魂も　ばらばらと落ちて
流れて　川や湖となる

でも　最後に行き着くのは
海ではありません

大きな　大きな　誰にも見えない
大きな手を持つ者がいて

流れ込むぼくらを
穢れた生活から掬い上げてくれる者がいる

ぼくら　罪人であるゆえに
その者の温みをより強く感じる

それは　懐かしくも心地よい懺悔の時
再び　天国を求め勇気をふり絞る時

――たぶん　クリスチャンなら　いや　少なくとも
リルケなら　落ち葉の詩で　そう言祝ぐだろう

でも　残念ながら　彼は　日本の海が
とてつもなく深いことを知らない

日本では　懺悔も勇気も
海溝の亀裂に埋もれて行く

失意

渡辺信二

黄昏の時
不意に隙間風が
ロウソクの炎と
髪の毛を揺らす

窓辺に　キンセンカの花が
静かに　闇に　沈んでゆく

病に伏すおまえへ

渡辺信二

初めて会ったおまえが
おれの胸を掻きむしる
あれは４月のことだった
斜めに日差しが差し込む廊下の
やけに長く感じられる時
頬を赤くしたおまえが歩く
あの姿が　今もなお　なつかしい

男女共学とはいえ
本当に好きな人とは
言葉を交わさない
そういう学園生活だった
何かを約束したわけではないし
就職や進学で別れ
おれは　海を渡ったが
気もちはなぜか
いつも　北へ帰っていった

あの原始林と小川
かじかや白樺
夏の激しい蝉の鳴き声
東京の生活が重苦しくて
気もちはなぜか
いつも漂い　北へ帰っていった

あの芝生や　この芝生で
若い男女が睦みあい
彼らの頭上には　青い雲　白い空
丈高い草むらをそっと分けて
小学生たちが覗き込み
風が飛ぶ
鳥が鳴く
空は　いつも　高かった

その空のした　おまえがいた
いつも　おまえがいた
ああ　おまえがいちばんだ
いちばんなのだ
そう　おれたち　いっしょになろう
おまえが恥ずかしげに下を向いて

「ええ」と答えた
ふいに全ての過去や景色が
後ろに引いて
あらゆる色彩が消え
おまえだけが残る

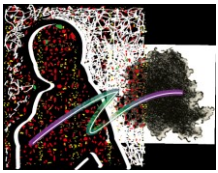
確かに　おまえだけが残る
おれたち　ここに愛を築く
そう誓ったはずだ

ここからだろう
おれたち
ああ　ここからなのだ

2017,08, ４〜2018,03,12 のあいだに贈られた詩誌・詩集その他

詩誌
『タルタ』43,44。
『布』34。
『GATE』25。
『銀曜日』47。
『万河・Banga』18。
『白亜紀』150。
『光芒』80。
『て、わたし』２。

詩集その他
高橋馨『夜更けの階段』(詩的現代叢書 26) 書肆山住、2017。
峰岸理子『鳥になりたかった女の子：memory book of AYAKO』峰岸了子編、
　　私家版、2017。
『モダンラブ』橋本まさや訳、新詩流社、1982。
『ロンリー・ムーン』橋本まさや訳、近文社、1987。



詩誌『立彩』第 13 号　2018 年 3 月 26 日発行
頒価 300 円
編集発行　「立彩」
〒400-8555　山梨県甲府市横根町 888
山梨英和大学人間文化学部　渡辺信二研究室気付
印刷　東洋出版印刷株式会社　TEL 03-3813-7311